

地域医療の現場から

近年、医療の世界では診断、治療に関して大きな進歩がみられますが、生活の質を高めることに貢献できるかどうかは、また別の話になります。今では画像診断で直径数ミリの病変が見つかるようになりました。特に「MRI」という装置では脳の構造から血管の状態まで見ることが可能です。脳転移癌のガンマナイフ治療や、血をサラサラにする



セコムメディック病院
脳神経外科

る抗血小板剤の使用などと相まって脳梗塞再発を減少させ、また他の臓器転移と比べて進行が速く、患者さんの残された生活の質を落としてしまう脳転移巣を抑え込むことが可能となりました。くも膜下出血を起こす脳動脈瘤については、発見はもちろん、手

今、脳神経外科医に出来ること

術の必要がない場合にその後の経過を観察する安全な観察手段としても有用です。

現在、日本の動脈瘤破裂による死亡率の低さは世界でもトップクラスです。しかし、今後ますます高齢化が予想さ

れる日本で、生命予後は改善したとしても、次に待つ「認知症」という問題に現在の進歩が役に立つかどうかはわかりません。認知症の課題は、原因の究明が進んでいないことと、治療が困難なこと。

MRIで脳の萎縮を確認出来ても、その評価はまちまちであり、認知症の原因を特定できるものではありません。一部のアルツハイマー型認知症では、神経伝達物質の分解を抑えることで効果を示している薬もあります。が、効果は限定的です。

西山 裕孝

医療講演会
「高齢者の脳疾患治療」
～脳梗塞を中心に～
6月11日(木) 14時半/
船橋アリーナ/講師: 西山裕孝医師/無料/要予約/Tel 457-9900

脳の栄養源のほとんどはブドウ糖なので、「認知症は脳の糖尿病」という説もあり、その考えに従って薬が開発され、いずれ登場するとの話もあります。
高年齢化は医療の成果でもありますが、その生活の質を改善するのに、明日の医療は貢献できるでしょうか。社会的保障が不可欠なのを前提に、脳神経外科医もお役に立ちたいのですが…。